

氏名（国籍）	白 成淑（韓国）		
学位の種類	博士（芸術）		
学位記番号	甲博第4号		
学位授与年月日	平成23年3月20日		
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	W. M. ヴォーリズの教会設計第一作「福島教会」礼拝堂の研究 ー日本の初期プロテスタント教会における空間装飾ー		
論文審査委員	主査	本学教授	上 野 憲 示
	副査	本学教授	小町谷 朝 生
	副査	本学教授	梅 田 一 穂
	副査	大阪芸術大学教授	山 形 政 昭

[論文内容の要旨]

本研究はウィリアム・メレル・ヴォーリズの教会建築第一作「福島教会」に関する研究である。「福島教会」（内部の礼拝堂も含む）は W. M. ヴォーリズによって 1909 年（明治 42 年）に設計され、同年竣工した。『福島教会百年史』（日本キリスト教団福島教会 100 年史編集委員会 1990 年 12 月刊行）によると数回の補修はあったものの、構造、内装、外装は共に創建当初の状態が良好に保存されている。* 2001 年に福島県最古のプロテスタント教会として国登録有形文化財に登録されている。しかし、登録されているにも関わらず、この教会の調査研究は教会堂の実測調査に留まっていた。ヴォーリズ建築の全体像を見るには不可欠であると思われるこの最初の教会建築を一層精査し、その建築手法、内部の構成に新たな見解を得たことを小論の第 1 の意義とした。

そして日本キリスト教団「福島教会」のヴォーリズ自身の手による設計図を新たに発見し、その解析と詳細な調査を通して、これが極めて特殊な手法による洋風建築であることを確実に明らかにしたことが、この小論の第 2 の意義である。なお、小論における洋風建築と様式建築との分類は次の通りである。先例に従って外観、内部の構造共に欧米からもたらされた寸法基準や構造によっている建物を「洋式建築」、外観は西洋風だが、内部の構造は日本在来の木割、小屋組による和洋折衷の建物を「洋風建築」と呼ぶことにする。

在来工法による洋風建築である「福島教会」礼拝堂が、全く独自の空間装飾を作り出した契機を推定し、それを生み出した施工の経過を推論したのが小論の第3の意義である。つまり、おそらくヴォーリズは小屋組を見出しにする計画を立てていたが、地元の棟梁には洋式小屋組を仕上げる力がなかったため、日本の在来工法を採らざるを得なかった。在来工法による梁や束では見出しにすることは不適當であったので、急遽天井によって小屋組を隠す方式に変更された。試行錯誤の結果、現在の三つ葉・尖頭アーチを交差した天井という、これまでにない室内空間を作り出したと推論するのが、現時点では、最も適切な選択であると考えられる。設計者の意図が技術的に実現困難となった際の急転換が、却って独自の空間を作り出した極めて稀な成功例であると考えられるに至った。この経緯を添付の原図面などを用いて考証した。

本研究では初期キリスト教からカトリック、プロテスタントに至る幾つかの先行文献を通して平面図や立面図による教会の空間を検討する。従って、空間の定義や基礎をカトリック教会建築の空間論参考にしている。その上で、プロテスタント教会堂ならではの空間を論じる。

第1章では教会建築と空間の意義

第2章では明治期における日本建築

第3章ではウィリアム・メレル・ヴォーリズの前半生と時代の背景

第4章では日本プロテスタント教会「福島教会」建設の契機と経過

第5章では「福島教会」における空間装飾

以上が本論文の構成であり、「はじめに」と「おわりに」が論文の趣旨と結論を要約する。

日本におけるプロテスタント教会礼拝堂の構造から空間の問題を取り出すためにはその根源となるプロテスタント建築の構造を取り上げる必要がある。

第1章ではカトリック教会建築史と基にした概括的な視点から教会建築空間を述べ、プロテスタント教会の空間へと論を進める。教会堂の聖なる空間を「教会空間」とし、外の俗世から隔離するために作った宗教的な意味だけではなく、設計による離脱によって作り上げた天井からあらわれた空間の意味を特に注目した。その意味を明確にプロテスタント教会を中心に、教会建築の歴史を通して教会の平面空間構造、立面による空間「架構表現」、天井による内部空間、光による内部空間を述べた。

第2章でヴォーリズの活躍する以前の日本の教会建築の状況を明らかにするため、当時の建築様式に対する見解を明らかにする。日本の建築の近代化に重要な役割を果たした教

会建築で、カトリック建築の要素をうけつぎながら変化したプロテスタント教会の建築、さらにプロテスタントの教義による建築の制約、そして建築に関わった棟梁や福島という地方の特殊性の中から「福島教会」の建築はどのように認められているか。この「福島教会」が外観とその構造から洋式建築と和式建築の折衷によって、洋風建築を作り出した一つの過程になった重要な建築であると考え、明治期における日本の建築をこの章で論じた。

第3章では「福島教会」が建てられる前過程として、ヴォーリズの生い立ちを中心に彼の信仰と建築の関りについて述べる。19世紀初頭アメリカでは宣教のブームが起り、たくさんの宣教師や一般の人々はその宣教活動に参加した。その中でヴォーリズも英語教師として来日したが、彼の宣教活動は認められなかった。しかし、ヴォーリズは新たな形で宣教を続ける。彼の宣教の道は「建築」つまり、「形」を通して成し遂げられる。この経由をヴォーリズ自伝『失敗者の自叙伝』をたどることによって跡付ける。

第4章では「福島教会」の設計と建設の状況を徹底的に分析し、解明する作業を行った。この章ではこれまで全く研究者の眼にふれずにあった、ヴォーリズ自筆の設計図を分析し、明らかになった空間の構造を検証する。ヴォーリズのオリジナル設計図14枚と教会の実測図15枚を比較しながら第3章で述べた日本建築の変遷を確認し、「福島教会」の特殊な建築構造を取り出した。

第5章は小論の重要な章として、第1章で取り上げた意味と第4章で上げた構造を通して、福島教会礼拝堂の「空間装飾」を論じる。この空間装飾の重要な要素である複雑な天井はどのようにして作り上げられたのであろうか。礼拝堂の光を十分に検討するため天井のみ分離して模型を作り、そこに入射する光の動きを通して現れるハイライトと陰影を装飾の重要な要素として考えた。ここに生まれる光によって多様に変化する造形を「空間装飾」の一つの要素、動く造形としてとらえる。5章では福島教会の天井をCG模型の基本構成と光の動きを通してその構造を分析し、論じている。

* 2011年3月11日の大震災により崩壊し、現存しません。

[審査結果の要旨]

白成淑（ベクソンスク）さんの学位請求論文は、メンソレータムの近江兄弟社を起こした、キリスト教宣教師で近代建築の作家であるアメリカ人、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880－1964）のその偉業を尋ねるものである。明治半ば（42年 [1909]）の擬洋風建築の貴重な近代化遺産である、福島県福島市内曾根田（現福島市宮下町 1－6）の「福島教会」に注目し、それが35年ほどの間に千件以上の建築に携わったヴォーリズの、日本におけるプロテスタント教会建築の第一作であり、数少ない貴重な現存遺構（韓国における遺構は既にほとんどが失われたという）と評価し、実地調査と資料探査を重ねて詳細な歴史的考証と位置づけをおこなった。

当初、様式建築をイメージしたヴォーリズが従来の和風工法を主張する日本人棟梁との間で、和式の骨体に洋風の外装・内装を重ねる和洋折衷の擬似洋風建築としての落としどころを得て、明治42年（1909）の暮に献堂式に至ったと考察。ヴォーリズの作図と目される設計図面を見出した快挙もあって、その上で実証的な建築の構造調査を試み、洋式の半円ヴォールト天井構想から和洋の混成的な技術活用の「洋風建築」に転化させた経緯や、基本的に装飾を排除しつつ空間を採光で演出するプロテスタント教会の建築的性格を際立たせた点は高く評価できる。（外壁煉瓦・木造平屋建、一部二階、塔屋付、銅板葺）

今後は、日本国内にとどまらず、さらには、米国における19世紀後半の木造によるプロテスタント教会堂の研究へとつなげていかれることが期待される。

以上、審査委員会における結論であったが、平成23年3月11日に東北地方に未曾有の大地震とその直後の大津波で大災害が勃発。いわゆる「東日本大震災」であるが、マグニチュード9.0の想定外の天災により白成淑さんが渾身の探究心をもって調査研究されたこのヴォーリズの「福島教会」は、400メートルの至近にある「福島新町教会」（新町8－6、昭和2年 [1927]、同じくヴォーリズ設計）とともに、深刻なダメージを受け、惜しまれつつも解体の判断が下された。

珠玉の近代化遺産ともいえるヴォーリズの教会建築の思いもよらなかった被災は、関係各位にとどまらず、広く日本国民全体の大きな損失であり、心から哀悼の意を表するとともに、「福島教会」「福島新町教会」の将来における蘇りを願うのみである。